

泉鏡花

霰ふる

正規表現縦書版

藪野直史 © オリジナル注附

「やぶちゃん注…本作は大正元（一九一二）年十一月『太陽』第十八巻第十五号に発表された。この作品は先に公開した、鏡花の随筆「幼い頃の記憶」（ブログ版は[ここ](#)、サイト縦書版は[ここ](#)）の内容を用いて、同年凡そ五ヶ月後に創作した作品である。

底本は所持する昭和一七（一九四二）年岩波書店刊「鏡花全集 巻十四」を用いた。但し、加工データとして、嘗つてあった、個人的に大変お世話になったサイト「鏡花花鏡」の同作の私のアーカイブしたものを使用した。ここに御礼申し上げる。但し、同サイトは底本が春陽堂版であること、更に、底本及びサイト主の正字不全・誤植（特にルビに多い）がかなりあるので、慎重に校正した。

注は、私が気になった箇所を第一とし、かなり踏み込んで書いたつもりである。中には、通常の読者には判り切ったものでも、ネイティヴでない方、若い方のために附したものもあり、対照の便宜を考え、各章の後に配置した。

なお、今まで通り、私は踊り字「く」「ぐ」は生理的に受け付けないので、正字に代えてある。と言うより、この踊り字を違和感なく、縦書でワードで配置するには、恐ろしく面倒であるからである。また、この踊り字はひらがなに對して使用するのが正しいが、鏡花は時に漢字（熟語を含む）にも用いている。その場合は、「々」ではなく、正字で示した。【二〇二六年七月十二日】

## 霰ふる

### 一

若い<sup>わか</sup>のと、少し<sup>すこ</sup>年の上<sup>とし</sup>なると……

此<sup>こ</sup>の二人<sup>ふたり</sup>の婦人<sup>をんな</sup>は、民也<sup>たみや</sup>のためには宿世<sup>すぐせ</sup>からの縁<sup>えん</sup>と見える。ふとした時<sup>とき</sup>、思ひ<sup>おも</sup>も懸けな

い處<sup>ところ</sup>へ、夢<sup>ゆめ</sup>のやうに姿<sup>すがた</sup>を露<sup>あら</sup>はす――

こゝで、夢<sup>ゆめ</sup>のやうに、と云<sup>い</sup>ふものゝ、實際<sup>じつさい</sup>は其<sup>それ</sup>が夢<sup>ゆめ</sup>だつた事<sup>こと</sup>もないではない。けれども、

夢<sup>ゆめ</sup>の方は、又<sup>また</sup>……と思<sup>おも</sup>ふだけで、取留<sup>とりとめ</sup>もなく、すぐ<sup>かげろふ</sup>に陽炎<sup>みだ</sup>の亂<sup>ごと</sup>るゝ如<sup>ごと</sup>く、記憶<sup>きおく</sup>の裡<sup>うち</sup>から亂

れて行<sup>ゆ</sup>く。

しかし目<sup>ま</sup>前<sup>あたり</sup>、歴然<sup>ありあり</sup>と其<sup>そ</sup>の二人<sup>ふたり</sup>を見たのは、何時<sup>いつ</sup>に成<sup>な</sup>つても忘れぬ。峰<sup>みね</sup>を視<sup>なが</sup>めて、山<sup>やま</sup>の端<sup>は</sup>

に亘<sup>たしず</sup>んだ時<sup>とき</sup>もあり、岸<sup>きし</sup>づたひに川船<sup>かはふね</sup>に乗<sup>の</sup>つて船頭<sup>せんどう</sup>もなしに流<sup>なが</sup>れて行<sup>ゆ</sup>くのを見<sup>み</sup>たり、揃<sup>そろ</sup>つて、

すつと抜<sup>ぬ</sup>けて、二人<sup>ふたり</sup>が床<sup>とこ</sup>の間<sup>はしら</sup>の柱<sup>で</sup>から出<sup>き</sup>て來た事<sup>こと</sup>もある。

民也<sup>たみや</sup>は九<sup>こい</sup>ツ……十歳<sup>とを</sup>ばかりの時<sup>とき</sup>に、はじめて知<sup>し</sup>つて、三十<sup>こ</sup>を越<sup>こ</sup>すまでに、四度<sup>よたび</sup>か五度<sup>いったび</sup>は

確<sup>たしか</sup>に逢<sup>あ</sup>つた。

これだと、随分<sup>ずぶん</sup>中<sup>なか</sup>絶<sup>だ</sup>えて、久<sup>ひさ</sup>しいやうではあるけれども、自分<sup>じぶん</sup>には、然<sup>さ</sup>までたまさか

のやうには思<sup>おも</sup>へぬ。人<sup>ひと</sup>は我<sup>わ</sup>が身<sup>からだ</sup>體<sup>ぶ</sup>の一部分<sup>ぶぶん</sup>を、何年<sup>なんねん</sup>にも見<sup>み</sup>ないで澄<sup>す</sup>ます場合<sup>ばあひ</sup>が多いから……

…姿見に向はなければ、顔にも逢はないと同一かも知れぬ。

で、見なくつても、逢はないでも、忘れもせねば思出すまでもなく、何時も身に着いて居ると同様に、二個、二人の姿も亦、十年見なからうが、逢はなからうが、そんなに間を隔てたとは考へない。

が、つい近くは、近く、一昔前は矢張り前、道理に於て年を隔てない筈はないから、十から三十までとしても、其の間は言はずとも二十年経つのに、最初逢つた時から幾歳を経ても、婦人二人は何時も違はぬ、顔容に年を取らず、些とも變らず、同一である。

水になり、空になり、面影は宿つても、虹のやうに、すつと映つて、忽ち消えて行く姿であるから、確と取留めた事はないが——何時でも二人連の——其の一人は、年紀の頃、どんな場合にも二十四五の上は出ない……一人は十八九で、此の少い方は、ふつくりして、引緊つた肉づきの可い、中背で、……年上の方は、すらりとして、細いほど瘠せて居る。

其の背の高いのは、極めて、品の可い艶やかな圓髻で顯れる。少いのは時々髪が違ふ、銀杏返の時もあつた、高島田の時もあつた、三輪と云ふのに結つても居た。

其のかはり、衣服は年上の方が、紋着だつたり、お召だつたり、時にはしどけない伊達巻の寝着姿と變るのに、若いのは、吃と縞ものに定つて、帯をきちんとべめて居る。

二人とも色が白い。

が、少い方は、ほんのりして、もう一人のは沈んで見える。

其の人柄、風采、姉妹ともつかず、主従でもなし、親しい中の友達とも見えず、從姉妹

でもないらしい。

と思ふばかりで、何故と云ふ次第は民也にも説明は出来ぬと云ふ。――何しろ、遁れられない間と見えた。孰方か乳母の兒で、乳姉妹。其とも嫂と弟嫁か、敵同士か、いづれ二重の幻影である。

時に、民也が、はじめて其の姿を見たのは、揃つて二階からすらすらと降りる所。

で、彼が九ツか十の年、其の日は、小學校の友達と二人で見た。

霰の降つた夜更の事――

「やぶちゃん注…『圓髷』学研の「全訳古語辞典」では「まる・わげ【丸髷】」と立項し、『江戸時代の女性の髪型の一つ。はじめは、髪を無造作に束ね、丸く巻き上げて結う庶民の女性の髪型をいったが、江戸時代後期には、主に既婚女性が結う、後頭部に楕円』（『だえん）形でやや平たい髷（まげ）をつけた髪型をいうようになった。「まるまげ」とも。』とあるから、「丸髷」を「圓（＝円）髷」と表記することに違和感はないと私は思う。と言うより、何より、鏡花の師であつた尾崎紅葉の知られた「金色夜叉」（明治三〇（一八九七）年一月一日連載開始されたが、明治三五（一九〇二）年五月で中断し、翌年、紅葉が病没したため未完で終わった。本「霰ふる」は大正元（一九一二）年十一月発表である。）の巻頭の「第一章」の終りの段落の頭に『圓髷に結ひたる四十約ばかりの小』（ちひさ）『く瘦せて色白き女の、茶微塵の糸織の小袖に黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家の内儀なるべし。』とあるのだから、文句の言いようはないのだ（国立国会図書館デジタルコレクションの「近代文学館 名著複刻全集」第二十五の前編の当該部をリンクしておく。髪型は、[グーグル画像検索「丸髷」](#)をリンクさせておく。

「銀杏返」当該ウィキに抛れば、銀杏返し『は、幕末ごろ』十『代前半から』二十『歳未満ぐらいの少女に結われた髷で、芸者や娘義太夫にも結われるようになり、明治以降は』三十『代以上の女性にも結われるようになった』。『京都では蝶々髷と呼ぶ。』[『銀杏髷』](#)

(いちようまげ…リンクは当該ウィキ)『を分けて折り返し、輪を』二『つ作ったことに由来する』とあった。[グーグル画像検索「銀杏返し」](#)をリンクさせておく。

「高島田」たかしまだ 小学館「デジタル大辞泉」に拠れば、『髻もじりの根を高く上げて結った島田まげ。

御殿女中などの髪形であったが、明治以降、花嫁の正装となった。根を最も高く上げたものを文金高島田という。高髻たかまげ』とある(島田髻は[当該ウィキ](#)を参照されたい)。[グーグル](#)

[画像検索「高島田」](#)をリンクさせておく。

「三輪」みつわ ウィキの「三輪髻」によれば、三輪髻みつわまげ』とは江戸時代後期から大正ごろまで女師匠や金満家の妾などに結われた髪型』で、『髻は一見』、『丸髻に似た形をしているが、結い方は銀杏返しと丸髻の合成』とある。[グーグル画像検索「三輪髻」](#)をリンクさせておく。「お召」めし「御召縮緬おめしちりめん」の略。縦・横ともに、練り糸を用い、表面に縞しま(織物の糸の縋りの関係に拠って表面に出来る凸凹でこぼこ)を織り出した織物。縮緬の上等なもので貴人が着用したので、この名があるという。「せば」・「縞縮緬しまちりめん」(以上は、概ね、小学館「日本国語大辞典」の各項目に拠った)。

「伊達巻」だてまき「伊達締め」だてまじに同じ。[サイト「きものレンタルエ」](#)の「伊達締めとは？わかりやすく説明」に拠れば、『伊達締めとは、地方によってはだて巻きとも呼ばれるアイテムで、きれいに着物を着付けるために用いられます』。『伊達締めとは、幅約』『cm 程度の薄い带状をしていて、具体的には、長襦袢と着物それぞれ一本ずつ使用するのが一般的です』。『長襦袢には衿合わせを安定させ』、『着物には衿合わせを安定させる』と同時に、『おはしよりの底を真っ直ぐきれいに整えるために使います』とある。詳しくは、リンク先を見られたい。

「風采」とりなり「取り成り」。「なりふり・人の身なりや素振り」の意。

「主従」しゅじゅう この名詞は、正確には歴史的仮名遣は「しゅじう」で、現代仮名遣は「しゅじゅう」である。所持する初版「小学館「日本国語大辞典」では、解説がないけれども、「[コトバンク](#)」の「[精選版 日本国語大辞典](#)」の「主従」を見ると、『しゅう・じゅう【主従】』に『主君と家来。主人と従者。しゅじゅう。』とし、「初出の実例」として『主従(シウジウ)の礼よりも猶深くして、事の外にぞ敬屈しける』(出典：源平盛衰記「一八」)とし、『しゅ・じゅう【主従】』には、『①主となるものと従となるもの。』とし、「初出の実例」として『付

合したる動産に付き主従の區別を為すこと能はざるときは」(出典：民法)(明治二九年)  
(二八九六)『二四四条』とあり、『②主人と使用人。主君と家来。しゅうじゅう。(色葉字類抄)』として、「初出の実例」として『主従(シユジュウ)ながら月日を過しける程に』(出典：発心集『七』)を示す。しかし、その後に、「主従の補助注記」を立項し、『中世以来「シユウジュウ」「シユジュウ」の両形が存在するが、「主」は呉音ス、漢音シュであつて、「シユウ」という字音は、『本来』、『ない。』とする。即ち、誤った「しうじう」の用例が、古く、軍記物語「平家物語」の異本の一つである、成立年代を十四世紀前期(鎌倉時代後期)以降と考えられている「源平盛衰記」に既に用いられていることが判る。そうした中で、近代に至るまで、この誤った慣用表現が生き残つて、鏡花もそれを用いているのである。』

## 二

山國の山を、町へ掛けて、戸外の夜の色は、部屋へやの裡うちからよく知れる。雲は暗くらからう…  
…水はもの凄く白しろからう…空の所々に颯さつと藥研やげんのやうなひびが入いつて、霰あられは其の中なかから、銀河の珠を砕くが如く迸ほとばしる。

ハタと止めば、其の空の破れた處へ、むらむらと又一重冷い雲が累りかゝつて、薄墨色に縫合はせる、と風さへ、そよとのもの音も、蜜蠟を以て固く封じた如く、乾坤寂けんこんじやくと成る。……

建着の悪い戸、障子、雨戸も、カタリとも響かず。鼯いたちが覗くやうな、鼠ねずみが匍匐はらばつたやうな、切つて填めた菱の實が、ト、べつかつこをして、ぺろりと黒い舌を吐くやうな、いや、念の入った、雑多な隙間、破穴が、寒さにきりきりと齒を嚙んで、呼吸を詰めて、うむと堪へて凍着くが、古家の煤にむせると、時々遣切れなく成つて、潜めた嚏、ハツと

噴出しさうで不氣味な眞夜中。

板戸一つが直ぐ町の、店の八疊、古疊の眞中に机を置いて對向ひに、洋燈に額を突合はせた、友達と二人で、其の國の地誌略と云ふ、學校の教科書を讀んで居た。――其頃、風をなして行はれた試験間際に徹夜の勉強、終夜と稱へて、氣の合つた同志が夜あかしに演習をする、なまけものゝ節季仕事と云ふのである。

一枚……二枚、と兩方で、ペイジを遣つ、取つして、眠氣ざましに聲を出して讀んで居たが、恠う夜が更けて、可恐しく陰氣に閉されると、低い聲さへ、びりびりと氷を削るやうに唇へきしんで響いた。

常さんと云ふお友達が、讀み掛けたのを、フツと留めて、

「民さん。」

と呼ぶ、……本を讀んでたとは、からりと調子が變つて、引入れられさうに滅入つて聞えた。

「……何、」

ト、一つ一つ、自分の睫が、紙の上へばらばらと溢れた、本の、片假名まじりに落葉する、山だの、谷だのを其まゝの字を、熟と相手に讀ませて、傍目も觸らず視て居たのが。

呼ばれて目を上げると、笠は破れて、紙を被せて、黄色に燻つてほやの上へ、眉の優しい額を見せた、頬のあたりが、ぽつと白く、朧夜に落ちた目かづらと云ふ顔色。

「寂しいねえ。」

「あゝ……」

「何時だねえ。」

「先刻二時うつたよ。眠く成つたの？」

對手は忽ち元氣づいた聲を出して、

「何、眠いもんか……だけでもねえ、今時分になると寂しいねえ。」

「其處に皆寝て居るもの……」

と云いつた——大きな戸棚、と云つても先祖代々、刻み着けて何時が代にも動かした事のない、……其の横の襖一重の納戸の内には、民也の父と祖母とが寝て居た。

母は世を早うしたのである……

「常さんの許よりか寂しくはない。」

「何して？」

「だって、君の内はお邸だから、廣い座敷を二つも三つも通らないと、母さんや何か寝ねて居る部屋へ行けないんだもの。此の間、君の許で、徹夜をした時は、僕は、そりや、

寂しかった……」

「でもね、僕ン許は二階がないから……」

「二階が寂しい？」

と民也は眞黒な天井を。……

常さんの目も、齊しく仰いで、冷く光つた。

「やぶちゃん注：この「二」のオープニングの長回しのロング映像は素晴らしい。」「一」の

末尾の「霰あられの降ふつた夜更よふけの事こと——」を受け、モノクロームのクレーン上のカメラは、夜の天空から降る霰を映し、ゆっくりと金沢の夜の静寂の街へとティルト・ダウンし、路地を潜るように歩き、町屋の間を人が歩むように巡りながら、そこには、後を予感させる不気味さを演出する細部描写を執拗にズーム・インする。そして、一つの家の前にちょっと止まっては、すうっと、その屋に入り込む。そのまま、奥に進み、二人の少年が一所懸命に徹夜勉強している部屋へ入り、フラット固定となり、二人を撮うす。知らぬうちに既にして、読者は鏡花花鏡の幻想的時空間に惹き込まれてしまっているのである。

「べっかつこ」現行では「べかつこう」（歴史的仮名遣「べかかう」・「べっかつこう」（同「べっかつかう」）で、本来は「めかこう」、元「目赤う」の音変化した語とされるが、実際の所は未詳である。「指で下瞼（したまぶた）を引き下げ、裏の赤い部分を見せること。」を指す。擲から擲かいや、拒否の気持を表わす時などにする仕草である。また、その仕草をする際に相手に投げる台詞でもある。同時に舌を出すこともある。「あかんべい」「あかんべ」がよく知られ、他に「べい・べか・べかこ・べっかんこう・べっかんこ・べっかこ・べっかこう」のヴァージョンがある。

「机つくえ」ルビはママ。所持する角川書店「新版 角川古語辞典」（久松潜一・佐藤謙三編・昭和五〇（一九七五）年刊）では、『つくゑ【机・案】』で立項するが、補注で『このかなづかいは従来「つくゑ」とされて来たが、平安初期の訓点にヤ行の「え」が使われており、それが古形であることが明らかになった。十一世紀以降「つくゑ」が一般になったという。』とある。「Weblio 古語辞典」の「学研全訳古語辞典」（学研教育出版）では、『つくゑ

【机・案】』で立項し、参考で『歴史的仮名遣いは、従来「つくゑ」とされていたが、近年、中古初期の資料により「つくゑ」とする説が有力。』と附す。

「風ふうをなして」一般人とは異なった独自の流儀や雰囲気を作り出すこと。

「二ひとつ二ひとつ、自分じぶんの睫まつげが、紙かみの上うへへばらばらと溢こぼれた」言わずもがなであるが、これは極めて物理的な現象で、後で示すように、徹夜の勉強に、実は、民也は眠い、のである。されば、頻りに眼をこすっているから、睫毛がばらばらと落ちるに過ぎない。しかし、これも鏡花のマジックで、睫毛がバラバラと散るといふ現象のみを、突如、描写することで、

疑似的な怪異感を嗅がせている確信犯なのである。次の注も見よ。

「目かづら」「目鬘」で、「めかつら」とも言う。厚紙に目の穴を空け、髪や眉・睫毛などを描いた、顔の上半分だけを覆う簡単な仮面を指す語で、別名「百眼」ひゃくまなことも言う。主に滑稽な役柄や特定の妖怪・鬼などを演じる際に用いられる。さればこそ、前に注した効果に、滑稽へと転じさせているものの、読者への妖異の疑似効果をダメ押ししているのである。

『「其處に皆寝て居るもの……」』と云いつた——大きな戸棚、と云つても先祖代々、刻み着けて何時が代にも動かした事のない、……其の横の襖一重の納戸の内には、民也と父の祖母とが寝ねて居た。』この箇所も、絶妙の語りの配置となっている。民也の応じた「其處に皆寝て居るもの……」は、次の、「大きな戸棚」にある「先祖代々、刻み着けて何時が代にも動かした事のない」位牌群を指しているように読者には読めてしまうからである。しかし、無論、実際には「其處に皆寝て居る」と言つたのは、「其の横の襖一重の納戸の内に」「民也の父と祖母とが寝ねて居る」事実を説明しているに過ぎないのだが、誰も、一読、そうは受け取らない、のである。——その戸棚に先祖代々の霊たちが何時も一緒にいて呉れているから、寂しくはない——と、百人が百人、読んでしまうように、妖気感が綿密に仕掛けられているのである。

「父」文中の主人公民也は、第三者として設定されているが、無論、鏡花である。彼の父清次は、加賀藩細工方の白銀師しろがねし（刀装具の下地作りを担当する職人）の系譜に属する彫金ちようきんや象眼細工などの鋳職人であった（工名は政光）。因みに、彼は明治二七（一八九四）年一月に亡くなっている。鏡花は満二十歳で、前年にデビュー作「冠彌左衛門」かんむりやざゑもんをものしていた。

「母は世を早うしたのである……」鏡花の母鈴は、加賀藩御手役者（専属の能楽師・狂言師を、特にかく呼んだのは、加賀藩と尾張藩であった）能楽の葛野流大鼓方中田万三郎豊喜の末娘で、江戸生まれであったが、明治一六（一八八三）年十二月、次女やゑの出産直後、産褥熱のために享年二十九で逝去した。鏡花は満九歳で、これは鏡花の強いトラウマとして残ることとなり、彼の多くの作品に、重要なファクターとして影響を与えている。本作でも、後半の民也の回想部分で、頗る印象的に登場する。」

「寂しいつて、別に何でもないぢやないの。」

と云つたものゝ、兩方で、机をずつて、ごそごそと火鉢に嚙着いて、ひつたりと寄合はす。

炭は黒いが、今しがた繼いだばかりで、尉にも成らず、火氣も立たない。其れよりも、徹夜の溫習に、何よりか書入れな夜半の茶漬で忘れられぬ、大福めいた餡餅を烘つたなごりの、餅網が、佗しく破蓮の形で疊に飛んだ。……御馳走は十二時と云ふと早や濟むんで、——一つは二人とも其がために勇氣がないので、……

常さんは耳の白い頬を傾けて、民也の顔を覗くやうにしながら、

「でも、誰も居ないんだもの……君の許の二階は、廣いのに、がらんとして居る。……」

「病氣の時はね、お母さんが寢て居たんだよ。」

コツコツ、炭を火箸でつゝ突いて見たつけ、はつと止めて、目を一つ瞬いて、

「え、そして、亡くなつた時、矢張、二階。」

「うゝむ……違ふ。」

とかぶりを掉つて、

「其處のね、奥……」

「小父さんだの、寢て居る許かい。……ぢや可いや。」と莞爾した。

「弱蟲だなあ……」

「でも、小母さんは病氣の時寝て居たかつて、今は誰も居ないんぢやないか。」

と觀世振が挫げた體に、元氣なく話は戻る……

「常さんの許だつて、あの、廣い座敷が、風はすうすう通つて、それで人つ子は居ませんよ。」

「それでも階下ばかりだもの。――二階は天井の上だらう、空に近いんだからね、高い所ところには何が居るか知れません。……」

「階下だつて……君の内でも、此の間、僕が、あの空間を通つた時、吃驚したものがあつたぢやないか。」

「どんなものさ、」

「床の間に鎧が飾つてあつて、便所へ行く時に晃々光つた……わツて、然う云つたのを覚えて居ないかい。」

「臆病だね、……鎧は君、可恐いものが出たつて、あれを着て向つて行けるんだぜ、向つて、」

と氣勢つて肩を突構へ。

「こんな、寂しい時の、可恐いものにはね、鎧なんか着たつて叶はないや……向つて行きや、消つ了ふんだもの……此から冬の中頃に成ると、軒の下へ近く来るつてさ、あの

雪女郎見たいなもんだから、」

「然うかなあ、……雪女郎つて眞個にあるんだつてね。」

「勿論だつさ。」

「雨のびしよびしよ降る時には、油舐坊主だの、とうふ買小僧だのつて……あるだらう。」

「ある……」

「可厭いやだなあ。こんな、霰あられの降る晩には何にも別べつにないだらうか。」

「町まちの中には何なんにもないとき。それでも、人ひとの行かない山寺やまでらだの、峰みねの堂だうだの、額がくの繪えがね、霰あられがばらばらと降る時とき、ばちくり瞬まばたきをするんだつて……」

「嘘うそを吐つく……」

と其それでも常つねさんは瞬またきした。からりと廂ひさしを鳴らしたのは、樋竹とひだけを、すべにる、落おちたまりの霰あられらしい。

「うそなもんか、其それは眞暗まつくらな時……丁ちやうど今夜見たやうな時なんだね。それから……雲くもの底そこにお月様つきさまが眞蒼まつさをに出て居て、そして、降る事があるだらう……さう云ふ時は、八田潟はつたがたの鮒ふなが皆首みなくびを出して打うたれるつて云ふんです。」

「痛いたからうなあ。」

「其處そこが化けるんだから、……皆みんな、兜かぶとを着て居るさうだよ。」

「ぢや、僕ぼくン許ところの蓮池はすいけの緋鯉ひごひなんか何するだらうね？」

其處そこには小船こぶねも浮うかべられる。が、穴あなのやうな眞暗まつくらな場末ばすゑの裏町うらまちを抜けて、大川おほかはに架け、近道ちかみちの、ぐらぐらと揺れる一錢橋いちもんばしと云ふのを渡つて、土塀どべいばかりで家の疎まばらな、畠はたけも池いけも所々ところどころ、侍町さむらいまちを幾曲いくまがり、で、突當りの松まつの樹きの中の其の邸やしきに行く、……常つねさんの家うちを思ふにも、恰あたかも此の時ことき、二更にかうの鐘かねの音おと、幽かすか。

「やぶちゃん注……炭すみは黒いが、今しがた繼いまいだばかりで、尉じようにも成らず、火氣くわきも立たな

い」私が気になったのは、「尉」で、「廣漢和辭典」には、最後に国字として、『炭火が白く  
なった灰。』とあったが、話が全く合わない。GoogleのAIの回答に（下線は私が附した）、  
『「火が尉（じょう）にも成らず」は、「火が少しも燃え上がらない」「物事がまったく発展  
せず、軌道に乗らない」という意味を持つ表現です。』としながら、正反対の記載が、次に  
出るのである。『語源と漢字の由来 尉（じょう）…薪（まき）をくべて火を熾（おこ）す際、  
火が勢いよく燃え上がる状態、あるいは炭火が真つ赤に安定した理想的な状態を指します』。  
『この言葉はもともと、能楽や狂言に登場する老人の面（翁面）を「尉」と呼び、それが  
「火が燃えて白髪 of 老人のようになる」様子に似ていることから、薪や炭が順調に燃焼して  
いる状態を表す隠語として使われていました。』とあった。これは頗る、このシークエンス  
に於いて納得出来る内容である。しかも、前に注した通り、鏡花の母の鈴は能楽師の娘であ  
る。そこで、確証を得るために独自に調べたところ、『火が尉になる』が、板垣俊一氏編の  
「新潟県の〈ことわざ〉」（ネットでPDFで入手可能）の中にあった。もしこれが、単に「燃  
え上がらない」と言う意味なら、当たり前前の表現であり、諺に成りえないと思う。寧ろ、能  
楽のメッカである佐渡を有する新潟ならではのニュアンスを感じ、しっくりくるのである。  
既に見た通り、金沢も能楽が盛んだった。しかも、鏡花の母と能とが、ダイレクトに繋がる。  
それは誤りだ、と言われる方は、是非、議論致そうと存ずる。

「觀世振が挫げた體に、元氣なく話は戻る……」小学館「日本国語大辞典」の「かみ、  
より【紙縫】」に、『細長い紙を、指先でよって糸のようにしたもの。かみなわ。こより。  
こうより。かんぜより。かみひねり。』とあった。この「かんぜより」の語源については、  
平凡社「世界大百科事典」の「紙縫／紙撚（こより）」の解説の中に、『こよりを（觀世よ  
り）とも呼ぶおこりについては』（1）『文明年間』（一四六九年から一四八七年）『に觀  
世太夫が翁（おきな）の烏帽子にその掛緒として用いたため』（2）『徳川家康が觀世太  
夫に命じて甲冑の毛切れや損所をつづり』『つくろう材料として作らせたため』『との』  
二『説がある。こよりそのものに俗信はないが』『これが水引となれば』『色の染分けや  
結び方によって吉凶の別が生ずる。』とあった。引用で後半部を添えたのは、これより起こ  
る怪異をプレに嗅がす（凶のニュアンス）効果が、このフレーズにはあると私は、読んだか  
らである。

「雪女郎」<sup>ゆきぢやうらう</sup> 雪女の別称。幻想文学者である畑耕一の句集「蜘蛛うごく」(ブログでは、[こ](#)で全句を完遂している。一括版[サイト版](#)(+縦書版)もある)に、「雪女郎を天井たかく語りける」([ここ](#))があるが、これは、極めて高い確率で本作に拠る確信犯作句であると考えられる。

「油舐坊主」<sup>あぶらなめぼうず</sup> ウィキの「油赤子」(あぶらあかご)の直系列妖怪、というか、異名と考えてよい。「油盗み」<sup>あぶらぼう</sup>「油坊」<sup>あぶらなめあかし</sup>等がいる。私の怪奇談の記事中にも、複数、出る。「とうふ買小僧」<sup>かひこぞう</sup> ウィキの「豆腐小僧」に同じ。

「八田潟」<sup>はつたがた</sup> 冒頭注で述べた通り、本作のルーツである、先日公開した鏡花の随筆「幼い頃の記憶」(ブログ版は[ここ](#)、サイト版縦書版は[ここ](#))を公開しているのだが、鏡花自身は、そこで、体験したロケーションの具体的な地名は不明としている。当該部を示す。

\*  
何處へ行く時であつたか、それは知らない。私は、母に連れられて船に乗つて居たことを覚えて居る。その時は何と云ふものか知らなかつた。今考へて見ると船だ。汽車ではない、確かに船であつた。

それは、私の五つぐらゐの時と思ふ。未だ母の柔らかな乳房を指で摘み摘みして居たやうに覚えて居る。幼い時の記憶だから、その外のこととはハッキリしないけれども、何でも、秋の薄日の光りが、白く水の上にチラチラ動いて居たやうに思ふ。

その水が、川であつたか、海であつたか、又、湖であつたか、私は、今それを茲でハッキリ云ふことが出来ない。兎に角、水の上であつた。

\*  
しかし、私は、以上から、以下のように推定した。太字は、そちらで私が施したものである。一部の読みは、ルビ化した。私が附加した読みはカットした。

\*  
さて、本作は、泉鏡太郎、数えて『五つぐらゐの時』の『秋の薄日の光りが、白く水の上にチラチラ動いて居た』頃の記憶とある。

彼は明治六(一八七三)年十一月四日に石川縣金澤市下新町([ここ](#)…グーグル・マップ・現在地名と同じ)で出生しているから、数え五つが、正確ならば、明治一〇(一九七

七)年の秋の出来事となる。

叙述では、ロケーションの細部が記憶に残っていないのであるが、『何處へ行く時であったか、それは知らない。私は、母に連れられて船に乗つて居たことを覚えて居る。その時は何と云ふものか知らなかった。今考へて見ると船だ。汽車ではない、確かに船であつた。』と述べ、更に、『幼い時の記憶だから、その他のことはハツキリしないけれども、何でも、秋の薄日の光りが、白く水の上にチラチラ動いて居たやうに思ふ。』と言い添え、しかし、『その水が、川であつたか、海であつたか、又、湖であつたか、私は、今それを茲でハツキリ云ふことが出来ない。兎に角、水の上であつた。』と述懐している。

この朦朧体の謂いを整理してみると――川とも言い難く――海かも知れぬが、明確には広大な『海』とは言えない――そして――『湖』とも断言出来ない――不思議な水域――ということになる。

私は、中高時代を、隣りの富山県高岡市伏木で過ごした。従つて、隣県である石川県金沢市辺りは、何度か訪れており、地理好きでもあつたから、古い旧金沢の旧地図等にも、一般人よりは遙かに良く知っているのである。

されば、この――何んとも言えない不思議な水域――の叙述を読んで、逆に川があり、その川が海に通じ、しかも湖のようにも見える場所――の有力候補が、直ちに、想起されたのである！

まず、彼の生地から、川は、当地の南西を流れる知られた「犀川」があり、これは、下つて一気に日本海に注ぐ。しかし、そのルートなら、明確に「川」であり、河口に出れば、日本海が広角でばっちり広がるはずで、このような表現にはならない。

しかし、生地直近の北西には、「浅野川」があるのだ。そしてそれは、北から北東北へ下つて、当時は非常に大きかった湖みたような「河北潟」かほくがたに下り、その潟の南西には、水路である「大野川」があり、そこを抜けると、「日本海」が開けるのである。

私は、この後者のルートこそが、彼の言うところの反語的描述をしている――川のように川でなく(その逆も可)――湖のようで湖でなく(同前)――海のように海でない(同前)場所を言っているのではあるまいか!?!――と考えるのである。大方の御批判を乞うものではある。因みに、「ひなたGIS」の戦前の地図で「河北潟」の広大な旧潟が見られる。赤

のポイントが、作者の生地下新町である。

\*

さて。私は、こう書いた後、六日経って、小学館「日本国語大辞典」のサイト「日国友の会」の「はったがた【八田潟】」に、『用例』に、『全國山多ク、又河多シ、北ニ鉄鎖、淺野諸水アリ、流レテ八田潟ニ入ル、〔北陸道・加賀誌〕』とし、『標註小學 日本地誌略 卷下』1878年編輯兼出版人 荒野文雄・坂本秀房」とあり、『語釈』「かほくがた（河北潟）」の異称。』とする。最後に、『編集部…第』二『版では、立項されませんでした。ちなみに、『河北潟』の語釈は「石川県金沢市の北方にある潟湖。昭和三九年（一九六四）の干拓事業で約六〇パーセントが陸地化された。西側に内灘砂丘がある。蓮湖。大清湖。八田潟」となっています。』とあるのを発見した（私は同辞典を所持するが、初版である）。されば、鏡花がこの小説で、この部分で、「八田潟」を出したのは、自分が書くことになった後の随筆「幼い頃の記憶」のロケーションを以前に『八田潟』ではなかったか?』と思ったことを示唆しているのではないか? さればこそ、私の推理は正しかったのではないか? と思った次第である。

おほかは「大川」注を附すに際して、一つ、最初から気になっていることを、ここで、枕として附す。この作品に登場する生身の「民也」と「常」さんであるが、前の引用で示した通り、鏡花は明治六（一八七三）年十一月四日に石川県金沢市下新町（ここ…グーグル・マップ…現在地名と同じ）で出生している。しかし、ウイキの「泉鏡花」に拠れば、泉鏡太郎は、明治一三（一八八〇）年四月（満六歳）、『市内養成小学校（現・金沢市立馬場小学校）に入学』、明治一七（一八八四）年九月（満十一歳）には、『金沢高等小学校に進学』するも、『翌年には日本基督一致教会のミッション・スクール北陸英和学校に転じ』、『英語を学ぶが』、明治二〇（一八八七）年（満十四歳前後）『には』、『ここも退学し、市内の井波他次郎私塾で英語などを講じた』とあって、本作の「民也」を、鏡花の以上に充てるとすると、『二』の二人とも試験間際の徹夜の勉強をしているという点、及び、その内容（外国の地誌略とする教科書を読んでいる）から見て、ミッション・スクール時代が、強いて当てようとするとすれば、なろうかとは思われる。当然、「常」という人物も、それに合わせようとするなら、短かった過去の小学校時代の時に、厚誼を得た同年齢の友達であることにな

ろう。設定は、同じ学校の試験勉強と採らないと、しっくりこない。但し、後の「五」で、民也は「去年、母さんがなくなつたからね……」と言っている。これを、鏡花自身に当て嵌めてしまうと、明治一七（一九八四）年で満十四、十五歳となり、金沢高等小学校時代のことになる。いや、これは、やはり、「常さん」は民也と同じ小学校の親友であると断定してよいのである。それは、「六」の後半で怪異に出くわした後、「常さん」が『三日ばかり學校を休んだ』とあるからである。この辺り、強いて、作者の経歴と同期して考えること自体に無理があると考えるべきであらう。

さて、本題の「大川」であるが、表立っては、金沢がロケーションとは示していない。しかし、先の「八田潟」から、それが判る。而して、主人公民也の家も、先の下新町で、違和感はなく、友人「常」も、如何にもな武家屋敷に住んでおり、旧金沢藩藩士の家柄であると採れる。問題は、この「大川」の表記である。これは、川の名ではない。それは続く「二錢橋」で明らかになる。これは、鏡花の旧生家の東北に面した浅野川を、ごく少し下った位置に今もある「中の橋」がモデルで、ここ（グーグル・マップ）にある。これは、鏡花の、実母への強い憧憬に満ちた名作「化鳥」（明治三〇（一八九七）年発表）の舞台である。ここ（グーグル・マップ）中央に鏡花の生地を配した）である。金沢市文化政策課の制作になるサイト「ちよこつと文学」の『化鳥』 泉 鏡花』のページに、『化鳥』の舞台は、浅野川に架かる「中の橋」です。橋を渡る際、一文の橋銭を支払ったことから「一文橋」とも呼ばれました。橋のたもとは、『化鳥』の文学碑が立てられています。中の橋は、歩行者専用の橋です。昔の木橋をイメージして建造された橋は、昼間と夜間のライトアップ時で、それぞれ異なる雰囲気を楽しむことができます。』とあった。但し、「侍町」云々とある「常さんの家」への道程は、実際の金沢市の旧武家屋敷跡（ここ…グーグル・マップ）等とは、正反対で、鏡花生地からは西南の金沢城外西側、犀川の近くであって、全く一致していない。というより、「中の橋」を渡ってしまったては、田圃が広がっているばかりであったはずである。これもしかし、一種、現実から幻想怪異の時空にズラす、鏡花の手法であると思う。或いは、唯一、はつきりと「八田潟」を出した関係上、その地方に近い場所を指し示したものとも思われる。それは、次の「四」の冒頭の二人の会話を膨らめます効果があるからである。

「二更」一夜を五等分した時間の単位で「初更」から「五更」まで。「亥の刻」「乙夜」に同じ。凡そ、現在の午後九時、又は、午後十時から二時間に相当する。冬であるから、後者である。」

#### 四

町なかの此處も同じ、一軒家の思がある。

民也は心も其の池へ、目も遙々と成つて恍惚しながら、

「蒼い鎧を着るだらうと思ふ。」

「眞赤な鰭へ。凄い月で、紫色に透通らうね。」

「其處へ玉のやうな霰が飛ぶんだ……」

「そして、八田潟の鰯と戦をしたら、何方が勝つ?……」

「然うだね、」

と眞顔に引込まれて、

「緋鯉は立派だから大將だらうが、鰯は雑兵でも數が多いよ……潟一盃なんだもの。」

「蛙は何方の味方をする。」

「君の池の?」

「あゝ、」

「そりや同じ所に住んでるから、緋鯉に屬くが當前だけれどもね、君が、よくお飯粒で、絲で釣上げちや投げるだらう。ブツと咽喉を膨らまして、くるりと目を圓くして腹を立つ

もの……鮎の味方に成らうも知れない。」

「あ、又降るよ……」

凄すさまじい霰の音、八方から亂打つや、大屋根の石もからからと轉げさうで、雲の渦く影が入つて、洋燈の笠が暗く成つた。

「按摩の笛が聞えなくなつてから、三度目だねえ。」

「矢が飛ぶ。」

「彈が走るんだね。」

「緋鯉と鮎とが戦ふんだよ。」

「紫の池と、黒い渦で……」

「薔を一寸開けて見ようか、」

と魅せられた體で、ト立たうとした。

民也は急に慌しく、

「お止し?……」

「でも、何だか暗い中で、ひらひら眞黒なのに交つて、緋だか、紫だか、飛んで居さう

で、面白なもの、」

「面白くはないよ……可恐いよ。」

「何故?」

「だって、緋だの、紫だの、暗い中に、霰に交つて——それだと電がして居るやう

だもの……其の部をこんな時に開けると、そりや可恐れぜ。

さあ……此から海が荒れるぞ、と云ふ前觸に、廂よりか背の高い、大な海坊主が、海から出て来て、町の中を歩行いて居てね……人が覘くと、蛇のやうに腰を曲げて、其の窓から睨返して、よくも見たな、よくも見たな、と云ふさうだから。」

「嘘だ！　嘘ばかり。」

「眞個だよ、霰だつて、半分は、其の海坊主が蹴上げて来る、波の激が交つてるんだとさ。」

「へえ？」

と常さんは未まだ臍に落ちないか、立掛けた膝を落さなかつた……

霰は屋根を駈廻る。

民也は心に恐怖のある時、其の部を開けさしたくなかつた。

母がまだ存生の時だつた。……一夏、日の暮方から凄じい雷雨があつた……雷光絶間

なく、雨は車軸を流して、荒金の地の車は、轟ながら奈落の底に沈むと思ふ。――

雨宿に駈込んだ知合の男が一人と、内中、此の店に居すくまつた。十時を過ぎた頃、一呼吸吐かせて、もの音は静まつたが、裾を捲いて、雷神を乗せながら、赤黒に黄を交へた雲が虚空へ、舞ひ舞ひ上つて、昇る氣勢に、雨が、さあと小止みに成る。

其の喜びを告さむため、神棚に燈火を點じようとして立つた父が、其のまゝ色をかへて立窘んだ。

ひい、と泣いて雲に透る、……あはれに、悲しげな、何とも異様な聲が、人々の耳をも

胸をも突貫つぎぬいて響ひびいたのである。

「やぶちゃん注…「葩」しとみ」この場合は、町屋の前面に嵌め込む横戸よこど。通常は、二枚、或いは、三枚からなり、左右の柱の溝に嵌め、昼は外して、夜に嵌める。「ひとみ」「しとみど」とも言う。

「荒金の地の車」あらがね つち くるま これは、私を含めて一般読者には最早、説明が必須であろう。この文字面だけを見て、当初、私も、鍛錬されていない粗鉄で車輪を拵えた大八車などをイメージしてしまっただが、これは、能の四番目物である世阿彌作の異風の作品「土車」つちくるま（観世・喜多流）の詞章に基づくものである。ストーリーは、深草少将が、妻に死別した悲しみのあまり、一子を見捨てて出家してしまい、家臣小次郎は幼君を土車に乗せて諸国を尋ね歩き、遂に、心も乱れて善光寺に至るが、ここで、父子が目出度く再会するという「男物狂物」である。サイト「能楽堂に通う人のための謡曲図書館」の「詞章 土 くるま」のページから当該箇所を示す（踊り字部分は正字化し、漢字を正字化し、一部の読みをサイト「謡曲の当帰學」の「信州・善光寺 〈柏崎・土車〉」の同文を参考にルビで添えた）。

\*

地「此歌の理に。此歌の理に。鬼もめでゝ去りぬれば。千方も亡び候ひて。一天四海波を。打ち治め給へば。國も動かぬ荒金の。土の車の我等まで。道せばからぬ大君の。御影の國なるをば。一人せかせ給ふか。

\*

まず、元々、「荒金」あらがねの「粗金（粗鉄）」が土の中にあることから、「地」つちの枕詞なのである。さらに、「地の車」ちのくるまは「土車」ちのくるま＝「土砂・砂利等を運ぶための粗末な手押し車」を指し、それは「この大地の上にあつて、卑しい身分として土車を牽くことを生業として生きる民」一般庶民を意味するのである。即ち、この「荒金の地の車は、轟ながら奈落の底に沈むと思ふ。」しづと言う民也の謂いは、「この世にありとある人々が、一人残らず、この驚くべき雷雨のために、奈落の底に沈んでしまふのではなからうか！」と幼少の自分が見た自然のカタストロフへの驚愕を表現したものである。」

笛を吹く……と皆思つた。笛もある限り悲哀を籠めて、呼吸の續くだけ長く、且つ細く叫ぶらしい。

雷鳴に、殆ど聾ひなむとした人々の耳に、驚破、天地一の聲。

誰も其の聲の長さだけ、氣を閉ぢて呼吸を詰めたが、引く呼吸は其の聲の一度止むまでは續かなかつた。

みなをのい  
皆戦いた。

ヒイと尾を微かに、其の聲が切れた、と思ふと、雨がひたりと止んで、又二度めの聲が聞えた。

「鳥か。」

「否。」

「何だらうの。」

祖母と、父と、其の客と言葉を交はしたが、其の言葉も、晃々と、震へて動いて、目を遮る電光は隙間を射た。

「近い。」

「直き其處だ。」

と云ふ。叫ぶ聲は、確かに筋向ひの二階家の、軒下のあたりと覺えた。

其が三聲めに成なると、泣くやうな、怨むやうな、呻吟くやうな、苦しみ跪くかと思ふ

意味が明かに籠つて來きて、新らしく又耳を劈く……

「見よう、」

年少くて屈竟な其の客は、身震るひして、すつくと立つて、内中で止めるのも肯かないで、タン、ド、ドン！と其の、其處の部を開けた。――

「何、」

と此處まで話した時、常さんは堅かたくなつて火鉢を掴んだ。

「其の時の事を思出すもの、外に何が居ようも知れない時、其の部を開けるのは。」

と民也は言ふ。

却説、大雷の後の希有なる悲鳴を聞いた夜、客が部を開けようとした時の人々の顔は

……年月を長く経ても眼前見るやうな、いづれも石を以て刻みなした如きものであつた。

部を上げると、格子戸を上へ切つた……其も鳴るか、簫の笛の如き形した窓のやうな隙間があつて、衝と電光に照される。

と思ふと、引緊めるやうな、柔かな母の兩の手が強く民也の背に掛つた。既に膝に乗つて、嚙り着いて居た小兒は、其なり、薄青い襟を分けて、眞白な胸の中へ、頬も口も揉込むと、恍惚と成つて、最う一度、ひよいと母親の腹の内へ安置され終んぬで、トもんどりを打つて手足を一つに縮めた處は、瀧を分けて、すんと別の國へ出た趣がある、

……そして、透通る胸の、暖かな、鮮血の美しさ。眞紅の花の咲満ちた、雲の白い花園

に、朗らかな月の映るよ、と其の浴衣の色を見たのであつた。

が、其の時点までの可恐しさ。――

「常さん、今君が蓐を開けて、何か覗いたつて、僕は潜込む懷中がないんだもの……」

簾の窓から覗いた客は、何も見えなかつた、と云ひながら、眞蒼に成つて居た。

其の夜から、筋向うの其の土藏附の二階家に、一人氣が違つた婦があつたのである。

寂寞と霰が止む。

民也は、ふと我に返つたやうに成つて、

「去年、母さんがなくなつたからね……」

火桶の面を背けると、机に降込んだ霰があつた。

ぢゆうと火の中にも溶けた音。

「勉強しようね、僕は父さんがないんだよ。さあ、」

鮎が兜を着ると云ふ。……

「八田潟の處を讀まう。」

と常さんは机の向うに居直つた。

洋燈が、じいじいと鳴る。

其の時であつた。

「やぶちゃん注…「氣を閉ぢて呼吸を詰めた」前の「氣を閉ぢて」が、やや判り難いかも知れない。空から響いてきた得体の知れぬ「異様な聲」を耳にし、「誰もが、恐怖のあまりに、氣配を消すかのように、息を殺して、身を硬くした」ことを表現したものである。これは、後半の「呼吸を詰めた」が「肺の中の息を止める」という直接的動作行為を指すのに対し、「氣を閉ぢて」は、その前段階（あるいは同時）に惹起する「全身が恐怖でギョツと竦み、精神的にも肉体的にも外部への発信を停止してしまう」という緊迫した状態を意味したものである。

「簫の笛の如き形した窓」これは、恐らく、パン・フルート (pan flute) 型の、中国伝来で本邦の雅楽楽器となった簫（当該ウィキの『木帯を使ったパンパイプ型の簫の例。』とキャプションのある写真をリンクする）を使った比喻である。私が想起するのは、株式会社竹六商店のカタログのここにある九つの画像のような、丸窓に配された均一でない格子が組み合わされたものではないかと想像する。これは、ここの後ろから二つ目の段落の冒頭では、「簫の窓」という隠喩表現で出る。」

## 六

二階の階子檀の一番上の一檀目……と思ふ處へ、欄間の柱を眞黒に、くツきりと空にして、袖を欄干摺れに……其の時は、濃いお納戸と、薄い茶と、左右に兩方、棲前を揃へて裾を踏みくゞむやうにして、圓鬘と島田の對丈に、面影白く、ふツと立った、兩個の見も知らぬ婦人がある。

ト其の色も……薄いながら、判然と煤の中に、塵を拂つてくつきりと鮮麗な姿が、二人が机に向つた横手、疊數二疊ばかり隔てた處に、寒き夜なれば、ぴつたり閉めた襖一枚……臺所へ續くだゞつ廣い枚敷との隔てに成る……出入口の扉があつて、むしやむしや

と巖の根に蘭を描いたが、年數算するに堪へず、で深山の色に燻ぼつた、引手の傍に、  
嬰兒の掌の形した、ふちのめくれた穴が開いた――其の穴から、件の板敷を、向うの  
反古張の古壁へ突當つて、ぎりりと曲つて、直角に莧莢色の干乾びた階子檀……十ばかり、  
遙かに穴の如くに高い其の眞上。

即ち襖の破目を透して、一つ突當つて、折屈つた上に、たとへば月の影に、一刷彩つ  
た如く見えたのである。

トンと云ふ。

と思ふと、トントントンと軽い柔かな音に連れて、裊が揺れ揺れ、揃つた裳が、柳の  
二枝靡くやう……すらすらと段を下りた。

肩を揃へて、雛の繪に見る……袖を左右から重ねた中に、どちらの手だらう、手燭か、  
臺か、裸火の蠟燭を捧げて居た。

蠟の火は白く燃えた。

胸のあたりに蒼味が射す。

頬のかゝり白々と、中にも、圓髻に結つた其の細面の氣高く品の可い女性の、纏れた  
髻の露ばかり、面婁れした横顔を、瞬きもしない雙の瞳に宿した途端に、スーと下りて、  
板の間で、もの優しく肩が動くと、其の臘の火が、件の繪襖の穴を覗く……其の火が、  
洋燈の心の中へ、燦と入つて、一つに成つたやうだつた。

やあ！開けると思ふ。

「きやツ、」

と叫んだ、友達が、前へ、背後の納戸へ匆込んだ。

口も利けず……民也も其の身體へ重なり合つて、父の寢た枕頭へ突伏した。

こゝの障子は、幼いものを夜度しを守つて、寒いに一枚開けたまゝ、霰の中にも、父

と祖母の情の夢は、紙一重の遮るさへなく、机のあたりに通つたのであつた。

父は夢だ、と云つて笑つた、……祖母もともに起きて出で、火鉢の上には、再び芳し

い香が満つる、餅網がかゝつたのである。

茶の煮えた時、眞夜中に又霰が來た。

後で、常さんと語合ふと……二人の見たのは、しかも其が、錦繪を板に合はせたやうに

同一かつたのである。

此が、民也の、ともすれば、フト出逢ふ、二人の姿の最初であつた。

常さんの、三日ばかり學校を休んだのは然る事ながら、民也は、それが夢でなくとも、

然さまで可恐いとも可怪いとも思はぬ。

敢て思はぬ、と云ふではないが、怗したあやしみには、其の時分馴れて居た。

毎夜の如く、内井戸の釣瓶の、人手を借らず鳴つたのも聞く……

轆轤が軋んで、ギイと云ふと、キリキリと二つばかり井戸繩の擦合ふ音して、少須して、

トンと幽かに水に響く。

極つたやうに、其のあとを、ちよきちよきと細かに俎を刻む音、時雨の頃から尙ほ冴

えて、ひとり寝の燈火を消した枕に通ふ。

「やぶちゃん注…突如、一気に怪異が出来る。この辺り、妙な漸層的なプロセスを、一切、飛ばして、核心の対象を、パッと示すところは、間髪入れぬ鏡花独特のシークエンス構成と言える。但し、民也は、実は、この怪異を目撃したほぼ直後に、『然さまで可憐いとも可憐いとも思はぬ。』と言い、『敢て思はぬ、と云ふではないが、恠したあやしみには、其その時分馴れて居た。』とあって、実は、肝心の主人公が、恐怖を殆んど感じていないのである。これは、怪奇小説としては、極めて特異であるが、そこが、鏡花の真骨頂の一面なのでも、ある、のである。

「即ち襖の破目を透して、一つ突當つて、」以上の「一つ」は、底本では「一つ」になっている。しかし、国立国会図書館デジタルコレクションの同書の昭和一七（一九四二）年の一刷の当該部を見たところ、「一つ」となっていた（この左丁の三行目）。底本は三刷であるから、第二刷或いは第三刷の印刷の際に、「と」の活字が原版から脱落してしまったものと思われる。特異的に訂した。」

## 七

續いて、臺所を、ことごとと云ふ蹻音がして、板の間へ掛る。——此の板の間へ、其の時の二人の姿は來たのであるが——又……實際より、寝て居て思ふ板の間の廣い事。

民也は心に、此を板の間ケ原だ、と稱へた。

傳へ言ふ……孫右衛門と名づけた氣の可い小父さんが、獨酌の酔醒に、我がねたを首あげて見る寒さかな、と來山張の屏風越しに、魂消た首を出して覗いたと聞く。

臺所の豪傑儼、座敷方の僭上、榮耀榮華に、憤を發し、しゃ討て、緋縮緬小袂の前を奪取れとて、竈將軍が押取った柄杓の采配、火吹竹の貝を吹いて、鍋釜の鎧武者が、の

んのんのんと押出したとある……板の間ケ原や、古戦場。

襖一重は一騎打で、座敷方では切所を防いだ、其處の一段低いのも面白い。

ト其の氣で、頬杖をつく民也に取つては、寢床から見る其の板の間は、遙々としたものであつた。

跽音は其處を通つて、一寸止やんで、やがて、トントんと檀を上る、と高たかい空で、すらりと響く襖の開く音。

「あゝ、二階のお婆さんだ。」

と、熟と耳を澄ますと、少時して、

「えゝん。」

と云ふ咳。

「今度は二階のお爺さん。」

此の二人は、母の父母で、同家に二階住居で、睦じく暮したが、民也のものを覺えて後、母に先だつて、前後して亡くなられた……

其の人たちを、こゝにあるものゝやうに、あらぬ跽音を考へて、咳を聞く耳には、人氣勢ない二階から、手燭して、するすると壇を下りた二人の姿を、然まで可恐いとは思はなかつた。

却つて、日を経るに従つて、物語を聞きさした如く、床しく、可優しく、身に染みるやうに成つたのである。……

霰が降れば思ひが凝る。……

然うした折よ、もう時雨の頃から、其の一二年は約束のやうに、井戸の響、板の間の  
跼音、人なき二階の襖の開くのを聞馴れたが、婦の姿は、當時又多日の間見えなかつ  
た。

白菊の咲く頃、大屋根へ出て、棟瓦をひらりと跨いで、高く、高く、雲の白きが、微  
に動いて、瑠璃色に澄渡つた空を仰ぐ時は、あの、夕立の夜を思出す……そして、美しく  
清らかな母の懷にある幼兒の身にあこがれた。

此の屋根と相向つて、眞蒼な流を隔てた薄紫の山がある。

醫王山。

頂を虚空に連ねて、雪の白銀の光を放つて、遮る樹立の影もないのは、名にし負ふ  
白山である。

やゝ低く、山の腰に其の流を繞らして、萌黄まじりの朱の袖を、俤の如く宿したのは、  
つい、まのあたり近い峰、向山と人は呼ぶ。

其の裾を長く曳いた蔭に、圓い姿見の如く、八田潟の波、一所の水が澄む。

島かと思ふ白帆に離れて、山の端の岬の形、にっと出た端に、鶴の背に、緑の被衣さ  
せた風情の松がある。

遙かに望んでも、其の枝の下は、一筵、掃清めたか、と塵も留めぬ。

あゝ山の中に葬つた、母のおくつきは彼處に近い。

其の松の蔭に、其の後、時々二人して佇むやうに、民也は思つた、が、母には然うした

女をんなのつれはなかつたのである。

月つきの冴さゆる夜よは、峯みねに向むかった二階かいの縁えんの四枚よまいの障子しやうじに、それか、あらぬか、松影射まつかげさしぬ

……戸袋とぶくろかけて床とこの間まへ。……

また前まへに言いった、もの凄すごい暗くらい夜よるも、年経としへて、なつかしい人ひとを思おもへば、降積ふりつもる霰あられも、

白菊しらぎく。

「やぶちゃん注…怪異は続いているのであるが、この終章では、恐怖は払拭され、寧ろ、前半では、滑稽な調子さえ、意識的に見える書き振りで、上手い。

「傳つたへ言いふ……孫右衛門まごもんと名なづけた氣きの可いい小父をじさんが、獨酌どくしゃくの酔醒よひさめに、我がねたを首くびあげて見る寒さむさかな、と來山張らいざんばりの屏風びやうぶ越しに、魂消たまげた首くびを出だして覗のぞいたと聞きく。」この俳句

「我がねたを首くびあげて見る寒さむさかな」は以下に添える「來山張らいざんばり」で判る通り、江戸中期の大坂の俳人小西來山こにしらいざん（承応三（一六五四）年～享保元（一七二六）年）の句である。「ブ

リタニカ国際大百科事典」に拠れば（コンマを読点に代えた）、『通称、伊右衛門。別号、『満平みつひら』、十万堂、湛翁、湛々翁、未来居士、宗無居士。大坂淡路町の葉種商の子。のち』、

『渡辺橋のほとり、さらに今宮に住』んだ。『前川由平、西山宗因の門。伊丹の上島鬼貫と親交があり、作風は談林から出たが』、『蕉風に近いものであった。』『元禄』五（一六九

二）『年刊の『咲やこの花』（菊子編）に句が載る。以後は前句付、笠付にも手を染めた。

編著『俳諧三物』、『今宮草』、『続今宮草』、『俳諧十家類題集』など』とあった。この句については、「ほととんぼ」氏のブログ「古典・詩歌鑑賞（ときどき京都のことも）」

の記事「我が寝たを首上げて見る寒さ哉（小西來山）」で、穏当な解釈例を、二件、挙げ

ておられるので見られたい。但し、私は、この小説に投げ込まれた、この句を、初読で、孫右衛門氏は、疑似怪談的解釈をしたものだと感じた。即ち——独酌の酔い醒めの朦朧の中、泥酔で寝転んでいる自分のしだけないさまを、生き霊となった自分が、屏風の上から見たよ——というシークエンスを狂句としたものという見解である。少なくとも、鏡花は、そうした意味合いで、この怪奇談に諧謔としてボーナスプラスをしたものと考えたのである。そ

れが「魂消<sup>たまげ</sup>た首<sup>くび</sup>を出<sup>だ</sup>して覗<sup>のぞ</sup>いたと聞く」というオチが極めて効果的に作用するからである。

「座敷<sup>ざしきかた</sup>方の階上<sup>せんじやう</sup>」舞台である民也の家では、少なくとも、一階には、座敷はない。父と祖母の寝ているのは納戸であり、通常、畳は敷かない。実際、「二」で民也は、常さんの屋敷に幾つも「座敷」があることを羨ましく語っている。「階上<sup>せんじやう</sup>」は「分を過ぎた贅沢<sup>ぜいさく</sup>をすること」の意である。

「美<sup>うつく</sup>しく清<sup>きよ</sup>らかな母<sup>はは</sup>の懷<sup>ふとしろ</sup>にある幼兒<sup>をさなこ</sup>の身<sup>み</sup>にあこがれた。」民也の、この言葉は、まさに鏡花自身の失われた母への憧憬そのものであり、このコードは、最早、幻想小説であることを度外視した、オマージュとなっている。私でさえ、この一文に、うるうるとなった。

「醫王山<sup>いおうぜん</sup>」現行でも「いおうぜん」と読む。石川県金沢市と富山県南砺市に跨る山塊。白兀山・奥医王山（最高峰：標高九百三十九・一六メートル）・前医王山などの山塊の総称。ここ（グーグル・マップ）。

「白山<sup>はくさん</sup>」石川県白山市と岐阜県大野郡白川村に跨る標高二千七百二メートルの活火山。両白山地の北部に位置する加越山地（加賀山地）の最高峰。富士山・立山と合わせて日本三霊山の一つ。日本では、ここより西には、二千メートル以上の山が存在しないので、最西端の最高標高の山である。ここ（グーグル・マップ）。

「向山<sup>むかひやま</sup>」これは金沢市にある標高百四十一・一五メートルの卯辰山<sup>うたつやま</sup>の複数ある別名の一つ。ここ（グーグル・マップ）。旧鏡花生地を中央に配した。

「八田潟<sup>はったがた</sup>」（＝河北潟）の画像を調べたところ、YouTube の YOSHIMARU NABEMOTO 氏の「内灘の風景・大正末期から昭和中期の河北潟」が、最も、よすがを偲ぶものとして、よいものと思う。

「あゝ山の中に葬<sup>やま</sup>つた、母<sup>はは</sup>のおくつきは彼處<sup>かしこ</sup>に近い。」鏡花の母鈴は、金沢市東山にある日蓮宗妙具山全性寺（ここ…グーグル・マップ）の境内にある中田家の墓所に眠っている。」